

3-1

山城地域に広がる宇治茶の生産地域は、大きく宇治、城陽・八幡、京田辺、宇治田原、和東、南山城、木津川の市町村域に分けられ、それぞれ固有の地理的特徴と生産体系を保有している。

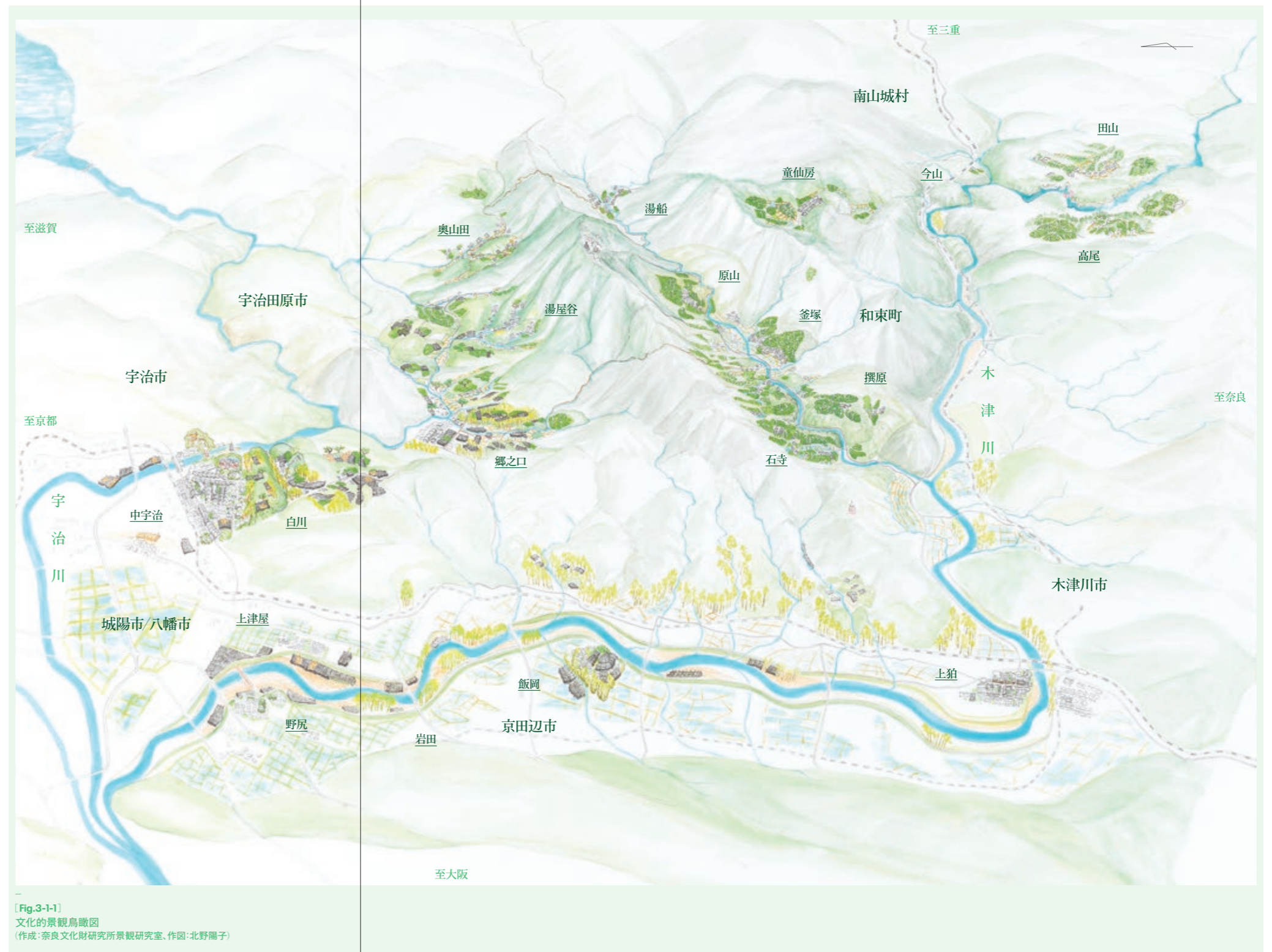
「宇治茶の文化的景観」の構造

「宇治茶の文化的景観」は、京都府南部の山城地域に広がる、日本茶の主力茶種である「抹茶」、「煎茶」、「玉露」を生んだ地である。これらの茶の生産と流通が起伏に富んだ地形とあいまって多様な景観をつくり出している〔Fig.3-1-1〕。

山城地域は標高500m程度までの山地が木津川、宇治川の2本の河川とその支流によって削られてきた大小の谷と丘陵からなる。茶生産地はこの谷筋や河川敷に多く立地しており、水系を通じて生産・流通両面において相互に関係を持っている。標高や地形による気候条件の差異、地質による土壌の差異が、茶生産の景観及び茶の種類、味の多様性を生んでいる。

木津川の上流の南山城村には、府内屈指の標高を活かした「露地茶園」が地形に沿って展開する。支流和東川に沿う和東町の谷では、丘の頂部まで駆け上がるような広大な山なり茶園が見る者を圧倒する。宇治川の支流に沿う宇治田原町の湯屋谷や奥山田の谷筋には、茶園の原形というべき小規模で素朴な「露地茶園」が開かれている。交通の要所である同町の郷之口には茶問屋街が形成されている。木津川の中流、奈良街道と交差する木津川市上粕には、輸出茶の集積地として栄えた茶問屋街が形成されている。木津川を下れば、京田辺市では独立丘陵の飯岡に開かれた傾斜地の「覆下茶園」が、城陽市・八幡市の両岸に所在し流れ橋で繋がれた上津屋集落に開かれた河川敷の「覆下茶園」が象徴的な景観を見せる。宇治川が丘陵部を抜けて平地に出た扇状地に広がるのが、中世以来の「抹茶」の生産・流通の歴史を持つ中宇治の茶問屋街と「覆下茶園」である。背後の丘陵部の谷筋には白川の「覆下茶園」も控える。

茶生産景観の領域的な広がりには、「抹茶」、「煎茶」、「玉露」の発祥を促した生産技術の開発・改良、そして茶の販路拡大の歴史的展開と対応している。「覆下茶園」は戦国期に中宇治で発祥し、後、「玉露」の誕生とともに木津川沿いへと展開した。「煎茶」は宇治田原町湯屋谷に始まり、「宇治製法(青製煎茶製法)」の開発、江戸への販路拡大とともに、和東町へ、そして幕末の輸出開始とともに南山城村へと広がり、さらに上粕に茶問屋街が形成されることとなった。第二次大戦後の増産期には、生産の合理化と機械化の進行の過渡期的な状況下で和東町、南山城村の山なり茶園が急拡大している。



〔Fig.3-1-1〕
文化的景観鳥瞰図
(作成:奈良文化財研究所景観研究室、作図:北野陽子)

3-2

山城地域に広がる宇治茶の生産地域は、大きく宇治、城陽・八幡、京田辺、宇治田原、和束、南山城、木津川の市町村に分けられ、それぞれ固有の地理的特徴と生産体系を保有している。

第3章 第2節 構成資産とその景観特性

宇治市域の宇治茶の生産景観 | 中宇治・白川

碾茶(抹茶)と玉露生産の歴史の中で欠くことのできない重要な位置を占めるとともに、日本の緑茶生産史上の核となす地域。

城陽・八幡市域の宇治茶の生産景観 | 上津屋・野尻・岩田

宇治郷に限られていた覆下茶園が19世紀以降に拡大された、宇治茶の展開過程を示す地域。

京田辺市域の宇治茶の生産景観 | 飯岡

丘陵の地形と地質を活かした覆下茶園の拡大過程を示す地域。

宇治田原町域の宇治茶の生産景観 | 郷之口・湯屋谷・奥山田

「宇治製法」が生み出され、日本全国に広まる起源となった、煎茶生産史上の核をなす地域。

和束町域の宇治茶の生産景観 | 石寺・撰原・釜塚・原山・湯船

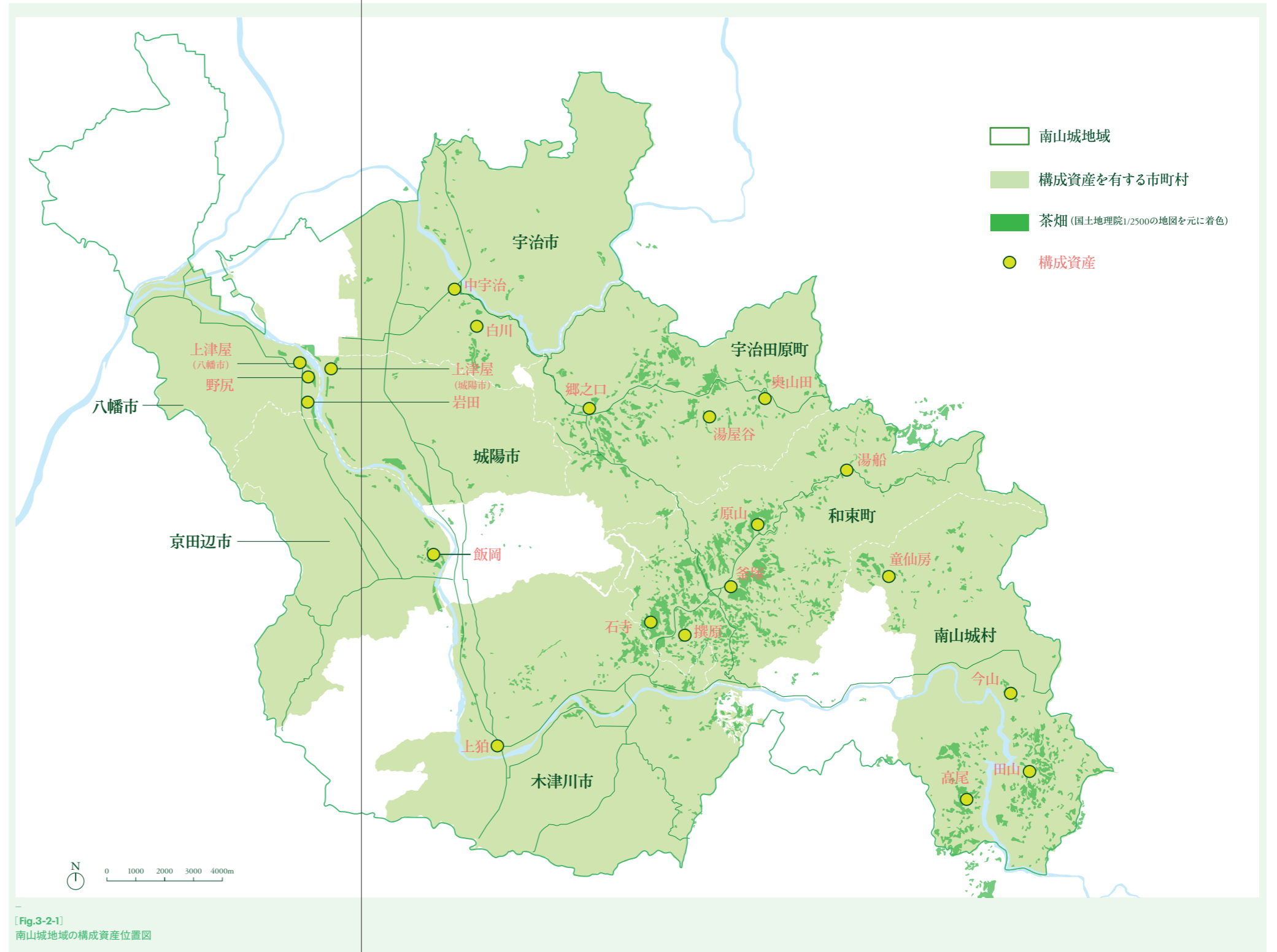
露地茶園と茶農家集落が一体となった土地利用と、江戸時代以来の宇治茶生産地の拡大過程を示す多様な山なり茶園の景観を見せる地域。

南山城村域の宇治茶の生産景観 | 田山・高尾・童仙房・今山

木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として、高い標高を活かした露地茶園を徐々に拡大してきた地域。

木津川市域の宇治茶の生産景観 | 山城町上狛

水陸両交通の結節点としての地の利を活かして茶問屋街が形成されている地域。



3-2-1

覆下栽培の開発による日本固有の碾茶(抹茶)の誕生、
そして玉露の開発がなされた、日本の緑茶生産史上の核をなす地域である。
茶問屋・茶農家の町並みや中宇治・白川の
覆下茶園の景観にその歴史が体现されている。

構成資産とその景観特性

宇治市域の宇治茶の生産景観

世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例



中宇治 白川

地理 琵琶湖に発する宇治川が丘陵から平地に流れ出る地点にある中宇治は、朝霧のかかる気象や扇状地の地質に特徴がある。この条件を生かして、古くは平安貴族の別荘地が生まれ、新しくは宇治茶生産が展開された。

歴史 平安時代に貴族の別荘地となり、格子状の街路が形成された。茶栽培は鎌倉時代に始まったとされ、16世紀後半に他地域に類をみない覆下栽培の方法が開発され、質の高い碾茶などを生産してきた。また、同じ頃から茶業を取り仕切る茶師が頭角を現し、江戸時代を通じて抹茶などの高級茶の製造と販売を独占し、宇治独特の茶文化を育ててきた。明治時代以降は茶師に代わって台頭した茶商が屋敷を構え、宇治茶の栽培、製造、販売の全てを行う地域として栄えた。

景観 宇治橋通りを中心に、戦国時代からの宇治茶業を取り仕切った茶師の旧宅や茶問屋、茶農家が立ち並び、茶の製造と販売を行う茶業街を形成する。かつては市街地の裏手に扇状地の地形を利用した茶園が広がっており、現在も市街地内や宇治川河川敷、段丘上などに本簀及び寒冷紗による覆下茶園が営まれている。中宇治の市街地と周辺の覆下茶園は国の重要文化的景観に選定されている。



[Fig.3-2-1-1] 宇治橋通り商店街の景観



[Fig.3-2-1-2] 茶工場の煉瓦造碾茶乾燥炉



[Fig.3-2-1-3] 宇治川河川敷の覆下茶園



[Fig.3-2-1-4] 中宇治地域 | 航空写真

中宇治 白川

地理 中宇治から山一つ隔てた谷筋に広がる茶生産集落である。谷筋に沿ってのびる通りに茶農家が建ち並び、集落背後の山裾及び段丘上に棚田や茶園が広がる。

歴史 12世紀初頭に創建された白川金色院は、中世には16の坊が営まれ、現在も惣門と九重石塔が残されている。また金色院の鎮守社とされる白山神社には鎌倉時代建立の拝殿(国重要文化財)が建っている。江戸時代には茶生産集落が発達し、金色院の坊跡は棚田や茶園へと転じた。

景観 谷筋の通りに沿って敷地内に茶工場を有する茶農家が立ち並び、古くは通り沿いに茶工場を構えたが、昭和初期以降になると敷地奥に茶工場が引き込まれ、大型化する。集落の背後には棚田と覆下茶園、露地茶園が広がり、茶園内には柿の木が点在する。山の裏手に位置する上明には、本簀を含む覆下茶園と露地茶園が谷を埋め尽くし、柿の木が彩りを添える茶園景観が広がる。茶園は国の重要文化的景観に選定されている。



[Fig.3-2-1-5] 覆下茶園



[Fig.3-2-1-6] 本簀覆下茶園



[Fig.3-2-1-7] 茶農家の集落景観



[Fig.3-2-1-8] 白川地域 | 航空写真

3-2-2

第3章 | 第2節
構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第2項 城陽市域の宇治茶の生産景観

宇治郷に栽培が限定されていた覆下茶園が19世紀以降に拡大され、碾茶及び玉露が生産されるようになった地域である。木津川を挟んだ対岸の八幡市とともに、河川敷に営まれた茶園と近隣の集落が宇治茶の展開過程を体現している。



世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例

上津屋

地理 城陽市域西部を流れる木津川沿いの平地に立地する茶業集落である。木津川の氾濫原であったために水はけのよい砂地が広がり、微高地に位置する集落の周囲に茶園と水田が営まれる。対岸の八幡市上津屋とは、かつては一体の集落であったが、木津川の流路変更に伴い2集落に分かれた。

歴史 宇治市域に隣接していることから、早くから茶生産が伝播し、17世紀中期には市域に茶園があったことが確認されている。かつて宇治郷に限られていた覆下栽培は、19世紀以降木津川流域に広まったが、本地域はその典型例である。

景観 木津川の河川敷に本簀や寒冷紗を用いた覆下茶園が広がっている。河川敷の平坦で水はけの良い砂地を利用した覆下茶園からは、松葉を思わせる濃い緑を持つ独特の碾茶が作られる。集落内には木造の碾茶工場などの茶工場が点在し、河川と生活・生業が一体化した姿を見せる。



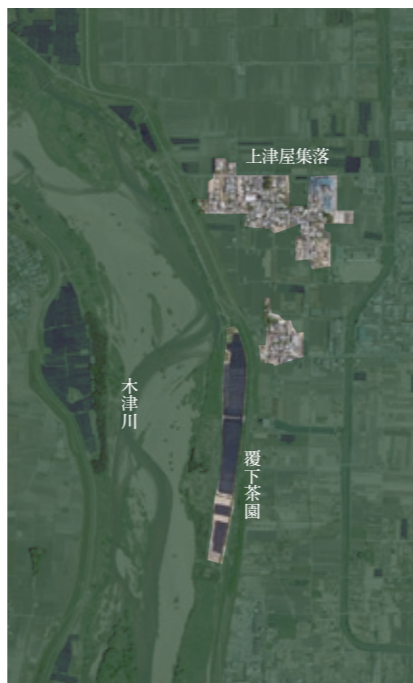
[Fig.3-2-2-1] 木津川河川敷に広がる覆下茶園



[Fig.3-2-2-2] 上津屋の集落



[Fig.3-2-2-3] 碾茶工場



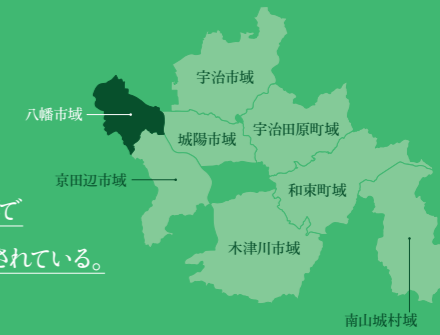
[Fig.3-2-2-4] 城陽市域 | 航空写真

3-2-3

第3章 | 第2節
構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第3項 八幡市域の宇治茶の生産景観

木津川を挟んだ対岸の城陽市とともに、宇治郷から19世紀以降に広がった覆下茶園が営まれた地域である。上津屋、野尻、岩田の3集落で木津川河川敷に覆下茶園が営まれ、碾茶が生産されている。



世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例

上津屋/野尻/岩田

地理 八幡市域の茶業は、上津屋、野尻、岩田の3集落で営まれている。木津川河川敷に堆積する砂混じりの柔らかい土質で栽培されるこの地のお茶は、山間部で栽培される「山茶」に対して「浜茶」と呼ばれ、松の葉のように濃い緑を持つことで知られる。

歴史 城陽市上津屋同様に19世紀以降に宇治郷から覆下茶園が広まった。上津屋は城陽市側の集落と同じ名前を持つが、これは木津川の流路変更により分断されたもので、元来は1つの集落であった。両集落はかつては渡し船で、現在は流れ橋(上津屋橋)によって結ばれている。

景観 木津川左岸の河川敷に、岩田から野尻、そして流れ橋の架かる上津屋にかけて連続的に覆下茶園が開かれている。重要文化財伊佐家住宅が立地する上津屋の浜垣内集落は、この地域の集落形態を典型的に伝えており、碾茶工場が設けられる中に、かつての揉み茶工場の建物も見ることができ



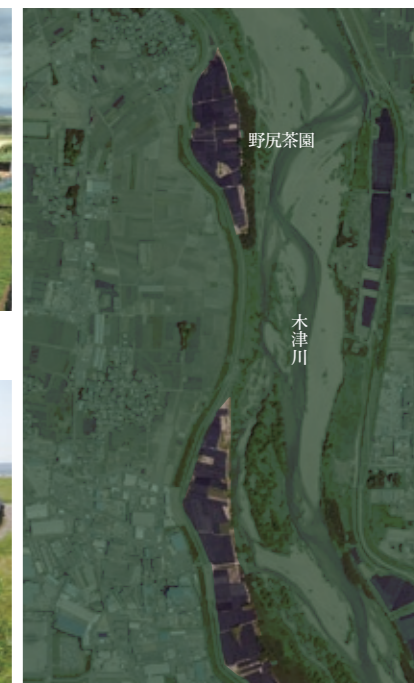
[Fig.3-2-3-1] 野尻の覆下茶園



[Fig.3-2-3-2] 流れ橋と木津川河川敷の茶園



[Fig.3-2-3-3] 堤防内に広がる覆下茶園



[Fig.3-2-3-4] 八幡市域 | 航空写真

3-2-4

丘陵の地形と地質を活かした
覆下茶園の拡大過程を示す地域である。
独立丘陵である飯岡の地形を活かした玉露生産の
土地利用と景観をひとまとまりで残している。

構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第4項 京田辺市域の宇治茶の生産景観



世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例

飯岡

地理 木津川に隣接する標高66.8mの独立丘陵を覆うように、集落と茶園等が立地する。丘陵周囲には水田が広がり、河川、平地、丘陵からなる伝統的な玉露生産の土地利用が見られる。

歴史 丘陵頂部には山城地域を代表する古墳群があり、丘陵周囲には条里制の痕跡を留める水田が広がる。集落内には江戸時代以来の手揉みによる茶工場や七井戸と呼ばれる井戸が残り、歴史の重層性がうかがえる。

景観 丘陵中腹の平坦面を集落が埋め、頂部及び外周部の傾斜地に玉露を生産する覆下茶園と果樹園が広がる。外周部の北面には丘陵を囲うように竹林が残る。丘陵の傾斜地はかつては果樹園が優勢であったが、徐々に茶園へと転化した。傾斜を生かして生産される玉露は香り高く、「山茶」と呼ばれる。



[Fig.3-2-4-1] 丘陵地形を活かした飯岡の土地利用



[Fig.3-2-4-2] 手揉み茶工場跡



[Fig.3-2-4-3] 七井戸古墳



[Fig.3-2-4-4] 京田辺市域 | 航空写真

3-2-5

「宇治製法(青製煎茶製法)」が生み出され、
日本全国に広まる起源となった、煎茶生産史上
最重要の技術革新と販路拡大がなされた地域である。
数多くの谷筋からなる自然条件を活かした茶園や集落の景観に、
生産と流通の歴史が刻まれている。

構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第5項 宇治田原町域の宇治茶の生産景観



世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例

奥山田 | 湯屋谷 | 郷之口

地理 宇治田原町を東西に横切る信楽街道の東端に位置し、北流する奥山田川と大福川が作り出す谷筋に立地する山村集落である。標高の高さと細い谷筋の地形を活かした茶生産が行われている。

歴史 山城から近江に抜ける主要な交通路であった信楽街道沿いの集落で、天神社や正寿院、遍照院等の数多くの寺社が今に残る。かつては石灰岩の採掘と石灰の精製が行われており、石積みの際跡が残されている。湯屋谷との間に位置する大福谷は宇治田原における茶栽培発祥の地とされ、江戸時代前期までには茶栽培が開始されている。

景観 大福谷には細い谷筋の奥に水田とともに茶園が開かれており、山林によって遮光された天然の覆下のような環境が作り出され、宇治茶の茶園の原形といべき景観が残されている。各谷筋に集落、水田と茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りの良い煎茶が生産されている。



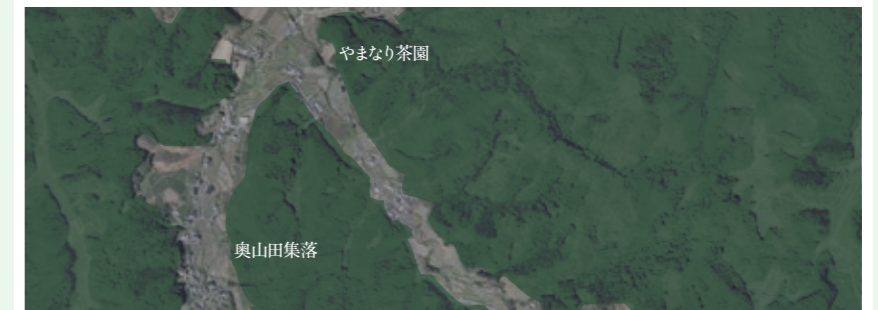
[Fig.3-2-5-1] 急斜面の集団茶園



[Fig.3-2-5-2] 明治の山なり茶園



[Fig.3-2-5-3] 奥山田の集落



[Fig.3-2-5-4] 奥山田 | 航空写真

奥山田 | 湯屋谷 | 郷之口

地理 信楽街道が山間に分け入る位置にある茶業集落で、塩谷、中谷、西谷、石詰等の複数に分かれる谷筋に集落と茶園が開かれる。中生代には海底だった場所で、「綴喜層群」の地層が露出し、貝類の化石を産出する。またかつては温泉が湧いて湯場が開かれており、現在も鉱泉が湧いている。

歴史 和銅2年(709)に湧くとされる温泉により湯場が開かれ、集落の起源となった。江戸時代中期に湯屋谷の永谷宗円が「宇治製法(青製煎茶製法)」を開発したと伝えられ、永谷宗円の生家跡や宗円を祀る茶宗明神社がある。

景観 狭い谷筋に高い石垣を築いてそそり立つ茶農家や茶問屋の建物が並ぶ特徴的な集落景観を見せる。茶園は谷奥や山間に散在する他、戦後に大規模な集団茶園が開拓され、丘陵の地形を活かした横畝の山なり茶園を形成している。奥山田の大福谷茶園は湯屋谷の茶農家が耕作し、防霜ファンを用いない茶園を守っている。



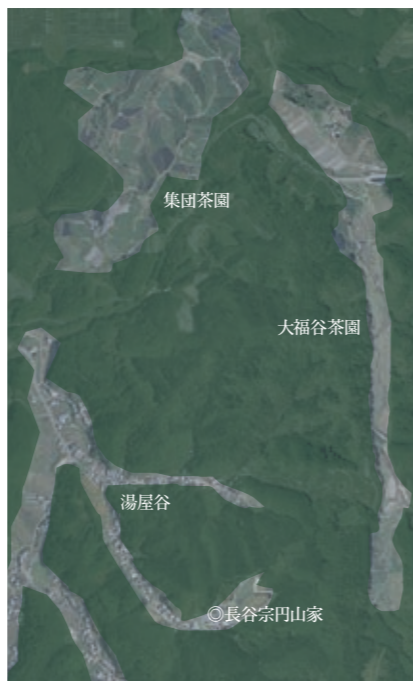
[Fig.3-2-5-5]大福谷の茶園



[Fig.3-2-5-6]茶宗明神社



[Fig.3-2-5-8]宗円生家跡



[Fig.3-2-5-9]湯屋谷 | 航空写真

[Fig.3-2-5-7]湯屋谷集落

奥山田 | 湯屋谷 | 郷之口

地理 宇治田原町を東西に流れる田原川に沿って広がる平地に立地する集落で、宇治田原への西の入口に位置する。集落は山口城の城下町に由来し、東西に通る信楽街道を取り込んで面的に展開する。

歴史 織田信長の命により山口甚秀康が築いた山口城の城下町として整備された。関ヶ原の戦い以降に廃城となり、元和9年(1623)に禁裏新御料所となった。以降は商家や茶問屋が集積する宇治田原の中心集落として栄えた。

景観 信楽街道と平行する複数の街路に沿って面的に形成される集落である。短冊状に割られた敷地に広い軒下空間を持つ茶問屋等の町家が並び、かつての物流の様子をうかがわせる街路景観を見せる。近隣の南地域や立川地域の水田では冬場に柿を干すための「柿屋」が建てられる。



[Fig.3-2-5-9]郷之口の茶問屋



[Fig.3-2-5-10]郷之口の町並み



[Fig.3-2-5-11]田園風景と柿屋



[Fig.3-2-5-12]郷之口 | 航空写真

3-2-6

露地茶園と茶農家集落が一体となった土地利用と、江戸時代以来の宇治茶生産地の拡大過程を示す多様な山なり茶園の景観を見せる地域である。露地茶園を主とする宇治茶生産の土地利用と景観を代表し、かつ宇治茶生産の拡大過程を典型的に示している。

第3章 | 第2節 構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第6項 和東町域の宇治茶の生産景観

世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例



石寺・撰原 | 釜塚 | 原山 | 湯船

地理 和東町西端の2集落で、町内では標高の低い地域である。和東川を挟んだ南北の山間に各集落が立地する。集落内を通る道はかつての奈良と信楽を結ぶ街道であり、街道に沿って集落が、そして集落の外に茶園が広がる。

歴史 江戸時代より茶生産が行われていたが、かつては稲作や果樹栽培、薪炭業を同時に営む複合生業集落であった。石寺では果樹園が多く営まれており、戦後の増産に伴って集落正背面の山腹を開墾した大規模な露地茶園が形成された。

景観 街道沿いに茶農家が散在する散村で、集落内に水田と露地茶園が営まれる。両集落ともに集落近辺に大規模な山なり茶園を有しており、中でも石寺には集落と相対する山に天空に駆け上るような茶園が開かれている。両集落の茶園は京都府選定文化的景観に選ばれている。



[Fig.3-2-6-1] 石寺の山なり茶園

石寺・撰原 | 釜塚 | 原山 | 湯船

地理 和東町中央部に位置する茶業集落で、山裾には茶農家等が密集する集落があり、集落の背後に山なり茶園が、正面の低地には水田が広がる。煎茶生産地の典型的な土地利用が見られる。

歴史 江戸時代の和東町一帯は禁裏御料の「和東郷」で、釜塚は茶生産地として知られていた。戦後の増産にともなって茶園が拡大され、山の頂に至る大規模な山なり茶園や山中の茶園が開墾された。

景観 山なり茶園、麓の集落、低地の水田からなる地形に適合した典型的な茶業集落景観を見せる。集落背後の山を頂きに至るまで大規模に開拓した急斜面の山なり茶園は、京都府選定文化的景観に選ばれている。



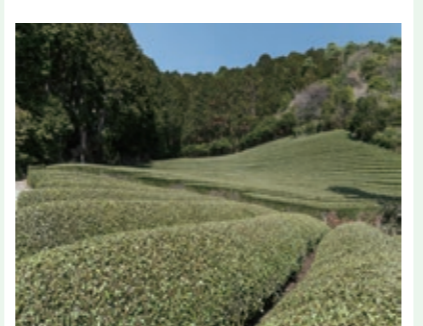
[Fig.3-2-6-2] 釜塚の山なり茶園

石寺・撰原 | 釜塚 | 原山 | 湯船

地理 鷲峰山南麓に広く形成された斜面に立地する集落で、和東川に沿う街道から一段上がった標高の高い位置を占める。南面する斜面を斜行するように街道が通り、街道に沿って茶農家が密に立ち並ぶ。集落の周囲を取り囲むように茶園が広がる。

歴史 中世山岳寺院である鷲峰山金胎寺の麓集落である。金胎寺の活動の中で原山には和東の中で最も早くから茶がもたらされたと考えられている。

景観 急な斜面に形成される茶農家集落には数多くの手揉み製茶用の二階建て茶工場が残されており、妻面を強調した独特の景観を見せる。集落周囲に広がる山なり茶園は京都府選定文化的景観に選ばれており、円形茶園のような印象的な茶園景観も見られる。



[Fig.3-2-6-3] 原山の大规模な茶園

石寺・撰原 | 釜塚 | 原山 | 湯船

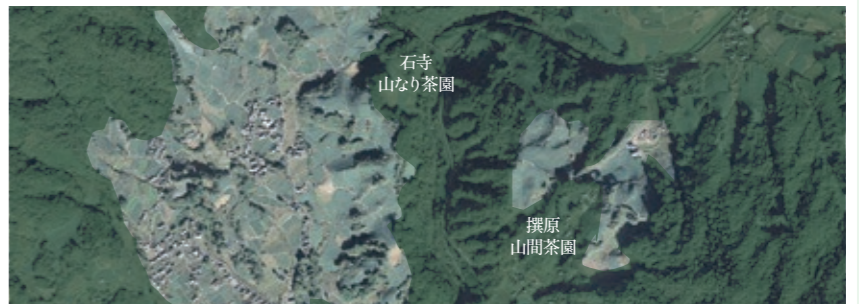
地理 和東最東部の山間地に位置する集落で、和東川沿いに通された街道に面して複数の集落が形成される。豊富な山林資源を背景に、林業、稲作、茶業の3つの生業が複合的に展開されてきた。

歴史 林業を主産業として財をなした集落で、その財政基盤を元に茶生産が行われた。原山同様に和東町内で早期に茶生産が開始され、近世の段階から上質な煎茶の生産地として知られていた。

景観 2階建ての手揉み茶工場を有する茶農家の屋敷が群として残されており、宇治茶の生産集落を代表する集落景観を見せる。小規模な茶園が集落背後の山裾などに点在し、近世以来の伝統的な茶生産の景観を今に伝える。



[Fig.3-2-6-4] 湯船集落と茶園



[Fig.3-2-6-5] 石寺・撰原 | 航空写真



[Fig.3-2-6-6] 釜塚 | 航空写真



[Fig.3-2-6-7] 原山 | 航空写真



[Fig.3-2-6-8] 湯船 | 航空写真

3-2-7

木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として露地茶園を徐々に拡大してきた地域である。明治以降の各段階における宇治茶生産の拡大の歴史が、高い標高に展開する独特の風土の中で展開した土地利用と景観に刻まれている。

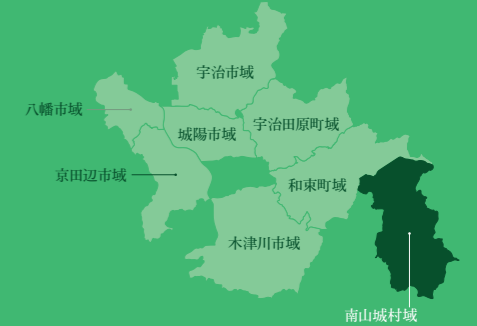
第3章 | 第2節

構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第7項

南山城村域の宇治茶の生産景観

世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例



田山 | 高尾 | 童仙房 | 今山

地理 名張川の右岸に位置し、緩やかな丘陵に多くの谷筋が入る地形に、山なりに開墾された緩勾配の茶園が点在する。高山ダムにより川霧が発生しやすい地域となっており、広範囲に茶園が広がっている。

歴史 かつて梅林が広がる地域であったが、養蚕のための桑畑へと転じるとともに、幕末の煎茶輸出を契機として茶園が広がった。昭和44年に高山ダムが建設されると、川霧が広がるようになりさらに茶園が広がった。

景観 斜面の茶園と平地の水田の間に家屋が立ち並ぶ、伝統的な茶生産集落の生活感が良く残る。集落から離れた山間には大規模な縦畝の茶園が広がる集団茶園が見られる。茶園は京都府選定文化的景観に選ばれている。



[Fig.3-2-7-1] 田山の集団茶園

田山 | 高尾 | 童仙房 | 今山

地理 名張川の左岸に位置する標高300mに達する丘陵上に開かれた茶生産集落である。名張川へと伸びる複数の支尾根の間はすり鉢状の地形となり、斜面に開かれた茶園の間に茶農家が点在する。

歴史 尾根に沿って家屋が点在する散村である。かつては名張川に近い標高の低い位置にも集落があったが、ダム建設に伴い多くが移転した。戦後に大規模な集団茶園が開拓された。

景観 支尾根の間のすり鉢状の急勾配の斜面に南山城特有の縦畝茶園が開かれ、その中に古い茶農家が点在する特徴的な景観を見せる。茶園のところで花崗岩の巨岩が露出する。茶園は京都府選定文化的景観に選ばれている。



[Fig.3-2-7-2] 高尾の茶園と家屋

田山 | 高尾 | 童仙房 | 今山

地理 和東町と接する標高500mの山上に位置する高原地帯で、香りの良い上質な茶を生産する。緩やかにうねる丘陵に集落と茶園、水田が広がる。

歴史 明治2年より京都府の官営事業として開拓された集落で、水田、畑地、茶園が開墾された。標高を生かした茶生産が行われ、戦後にもさらに茶園が拡大された。

景観 山間の緩やかな丘陵地に水田と山なり茶園が対を成す素朴な景観が営まれている。南山城村の中でも縦畝ではなく横畝が優勢で、村内の茶生産の景観の多様性が伺える。



[Fig.3-2-7-3] 童仙房の町並み

田山 | 高尾 | 童仙房 | 今山

地理 木津川右岸の標高150mほどの河岸段丘上の集落である。近隣の高山ダムや木津川により発生する川霧が茶の生育に適した気象を生んでいる。

歴史 昭和44年の高山ダムの造成により、高尾や田山より移住した農家によって開墾された。

景観 緩勾配の広い斜面に、畝長約200mに及ぶ、他に類を見ない広がりのある茶園景観をみせる。煎茶だけでなく碾茶生産もおこなっており、露地茶園に加えて覆下茶園も見られる。茶園は京都府選定文化的景観に選ばれている。



[Fig.3-2-7-4] 今山の茶園



[Fig.3-2-7-7] 田山 | 航空写真



[Fig.3-2-7-8] 高尾 | 航空写真



[Fig.3-2-7-9] 童仙房 | 航空写真



[Fig.3-2-7-10] 今山 | 航空写真

3-2-8

木津川と奈良街道が交差する地に位置する上狛には、水陸両交通の結節点としての地の利を活かした茶問屋街が形成されている。煎茶の生産拡大にともなって形成された茶問屋街であり、宇治茶生産の変遷過程を反映している。



世界遺産の評価基準 [iii] [v] [vi] を示す代表事例

第3章 | 第2節
構成資産とその景観特性

第3章 | 第2節 | 第8項 木津川市域の宇治茶の生産景観

山城町上狛

地理 木津川と奈良街道が交差する地に位置し、木津川水運と陸上交通の結節点としての地の利を生かした茶問屋街が形成された。奈良街道の木津川渡河点にはかつて泉橋が架けられていた。

歴史 かつては綿業を商う集落であったが、幕末からの煎茶の輸出拡大にともない茶生産地への近さと木津川水運を利用できる地の利を生かして順次茶業へと転換し、茶業集落が形成された。煎茶の販路が国内向けとなってからも茶問屋街として栄え、現存する茶問屋の建物は、幕末建設のものから、大正、昭和初期に建設されたもの、戦後の鉄筋コンクリート造の茶工場まで多岐にわたる。

景観 奈良街道を中心に、その背後を含めて面的に茶問屋街が広がっている。敷地は間口が広く、古くは間口一杯に茶工場を配し、大正期頃からは正面に長屋門を構え、中央に庭を設けて茶工場と主屋が囲む配置を採る。路地に入ると、焼杉の腰板を貼った茶工場や土蔵に囲まれた独特の景観を見せる。



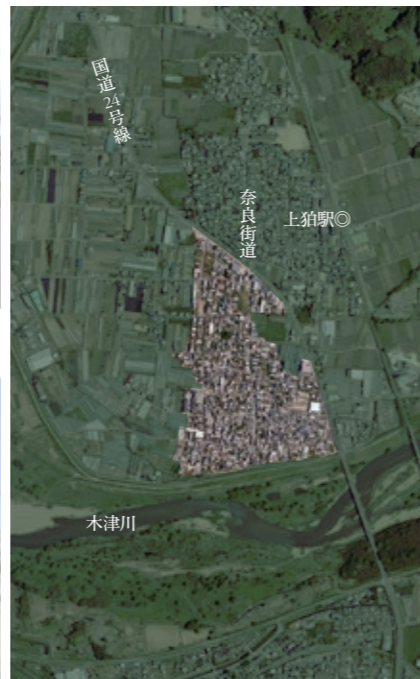
[Fig.3-2-8-1] 茶問屋



[Fig.3-2-8-2] 近代化された茶工場



[Fig.3-2-8-3] 泉橋寺石造地藏菩薩坐像



[Fig.3-2-8-4] 山城町上狛 | 航空写真

第4章 | 第1節
本資産の現状と課題
[46]

第4章 | 第2節
保存管理計画と活用
[48]

第4章 | 第2節 | 第1項
資産全体の包括的保存管理計画
[48]

第4章 | 第2節 | 第2項
個別構成資産に係る保存管理計画
[50]

第4章 | 第2節 | 第3項
活用への取り組み
[52]

第4章 本資産の現状と保存活用